

コロナ禍で協同的な学びをどう作る？

～オンラインを活用した協同学習の可能性～



遠田将大氏

早稲田大学大学院教育学研究科
博士課程在籍時に 本田恵子研究
室で主に協同学習について研究し、
2021年度より現職。

第2回研修会では、遠田将大先生に「コロナ禍における協同的な学びのあり方」についてお話しいただきました。

協同学習とは

現在、協同学習、協働学習、協調学習、アクティブラーニングなど様々な集団での活動が注目されています。今回テーマに置かれている「協同学習」は、良い関係性の中で学び合うこと(安永, 2010)、すなわち協同の意義や価値も学ぶ活動であることを意味します。その上で、協同学習の要件として、次の5つがあげられています。①互恵的な相互依存関係がある、②相互交流の機会がある、③個人の責任が明確にある、④ソーシャルスキルや協同のスキルが指導される、⑤ふり返りがなされる (Johnson, Johnson, & Holbec, 2002/涌井, 2013) ことです。④については、直接的なコミュニケーションが減少したコロナ禍において、より必要性が高まっています。

さらに、協同学習がもたらす恩恵には、学習意欲の向上や問題解決能力の向上、自尊心の改善や他者視点の獲得など、学習面のみならず心理・社会面でも大きな影響を与えるといわれています。

コロナ禍で協同学習を実現するためには

現在、コロナ禍における学校現場では、社会的距離を保ちながらどう教育活動を充実させるかという点が課題となっています。特に、協同学習を実施するためには様々な配慮と工夫が必要です。そこで、現場における実践事例として、マスクや手洗いを徹底した上で机の真ん中にスペースをつくり感染対策をしながら協同学習をする学校、デジタルとアナログの両方を駆使してコミュニケーション方法に工夫を加え協同学習を実施する学校等について紹介がありました。

協同活動を実施する上では、こうした工夫とは別にもうひとつ重要な視点があります。それは、子どもたち自身の協同活動に対する準備です。小学生の協同学習へのレディネスを調査した研究(遠田, 2021)によれば、協同学習に対して否定的である子どもは47%という結果が示されています。協同学習に対して否定的な子どもたちは、ルールを守る力が弱い、相手への共感性が乏しいなどの課題を抱えているのが現状です。

そこで本研修会では、協同学習に対して否定的なタイプの子もたちにはどのような足場掛けが必要か、より良い関係づくりの手助けをどのように行うのか、実際にグループワークを体験することで参加者と共に考えていきました。

グループワークトレーニング（体験①）

協同学習の5要件を体験するためのワークをしました。このグループワークトレーニングの目的は、「自分のことを話す力、相手の話を聞く力を高める、協同することの価値に気づくこと」です。グループワークは5人一組で始まり、それぞれの人に一枚ずつ情報カードが配られます。そこには異なる情報がいくつか書かれており、それらの情報をグループのみんなで共有することでミッションが達成されます。つまり、グループメンバーがいかに正確な情報を伝え合えるか、そして、その関係づくりをどのように行うかがポイントになります。（グループワークトレーニングについては、以下の書籍を参考にしてください）実際に体験した参加者からは、協同学習で大切なこととして、「自分と他のメンバーの長所を事前に把握し、役割分担すること」「失敗を許し合える雰囲気をつくりをすること」「情報を正確に聞き取りながら、タイミングよく正確に情報を端的に伝えること」「気づいていない情報に気づく声かけをすること」などがあげられました。

- 『学校グループワーク・トレーニング3』日本グループワーク・トレーニング研究会,図書文化（2016）
- 『インクルーシブ教育で個性を育てる 脳科学を活かした授業改善のポイントと実践例』本田恵子 編著, 梧桐書院（2014）

教科教育における協同学習

「情報カード」を使った活動は自分の意見がなくてもカードを頼りに発言することができますが、教科教育での活動では自分の考えや意見を持った上で話し合う必要があります。自分の意見がないままの参加だと、意見をもつ人に「ただのり」することになり、「互恵的な相互依存関係」となれないからです。そこで、自分の意見や考えを作るのを補助するワークシート作りが重要になります。また、「意見集約シート」を活用することにより「個人の責任を明確」にし、「ふり返り」も行います。では、どのような学習課題でどのようなワークシートを作ればよいのでしょうか？

協同学習を成立させるワークシート作り（体験②）

「体験②」では、学校種や教科別のグループに分かれて、どのような単元でどのような協同学習ができそうか、その際、どのようなワークシートを作るとよいかなどを話し合いました。遠田先生から「協同学習は知識活用型の授業で行いやすい」ということ、ワークシートは、「低学力層」「学力的に中間層」「高学力層」学級の子どもそれぞれのどこに課題があるのかを見立てて作成することが重要であることが示されました。例えば、知識がなくて分からない子には、学習に必要な知識を載せておく。どう書いてよいのか分からない子には、説明に必要な文型を載せておく。どのような道筋を進めるか分からない子には、計画性を活性化させる発問を設定するなど挙げられました。

グループによって話し合った内容は様々でした。実際にワークシートの作成に取り組んだグループや、今までの実践が「教科学習」ではなく、「協同学習」をめあてにしてしまっていたことに気付いたグループもありました。記録系のシートを画面共有しながら話し合いを進めていく体験の中で、改めて発問の大切さや学級内の関係作りの大切さを実感する声が多く聞かれました。

-----ご参加の皆さまからの感想-----

- ・大変勉強になりました。わたくしの作るワークシートは、車のナビのように、学習者がさして考えなくてもできてしまうようになりがちで、試行錯誤を重ねておりましたので、今回の研修は光を与えていただけたと思っております。
- ・自分が実際に情報カードでの体験をすることで、情報カードが自分の意見の代わりをしてくれて、安心感を持てることが実感できました。話し合う土壌の重要性を体感で感じることでできてとてもよかったです。
- ・グループワークトレーニングのワークを体験し、話し合い半ばで心が折れそうになる子どもの気持ちも体験したような気がします。子どものつまずきは、それぞれのところにあり、共同できるための準備の大切さ、さらにそのベースとなる安心できる状況作りの大切さを実感しました。
- ・教科の学習で使うワークシートも意見を持つための支援方法であると認識しました。まず準備段階として協同学習の素地を作る必要性を感じました。協同学習することが目的にならないよう実態に合わせてワークシートを作成し、実践してみたいと思います。